



Vol. 47

CONTENTS

- 【コラム】 小学校での情報リテラシー教育を!… 片山 敏郎
【解説】 情報科教員のための教員免許更新講習 (前)… 久野 靖
【解説】 データベース実習を支援するツール sAccess (サクセス)… 長瀧 寛之 兼宗 進

COLUMN



小学校での情報リテラシー教育を!



小学校でのタブレット端末導入が進み始めている。

文部科学省では、2020年までに1人1台の情報端末の整備を明言している。

2010年のiPad発売と、原口総務大臣による「原口ビジョン」の発表当時は、世論も含め、デジタル教科書1人1台に対し懐疑的であった。

2014年末の今、その状況は、大きく変わってきている。

その理由の1つは、子どもの変化にある。現在の児童・生徒のほとんどは、すでにネットワーク対応型携帯ゲーム機やタブレット端末、スマートフォンに囲まれた中で育ってきている。2013年ごろからは、大手通信教育各社もタブレット端末配信型の通信教育を開始し、学びの中でもタブレットを活用することが当たり前になってきた。子どもたちの「学び」に、タブレットを取り入れる素地があるのである。

理由の2つ目は、タブレット端末の技術革新である。軽く、早く、学習に役立つ多様なコンテンツのあるタブレット端末が整備されてきた。従来のICT (Information and Communications Technology) は、よくフリーズしたり、立ち上げに時間がかかったりと、子どもの思考を妨げることが多かったが、その点が大きく改善された。それにより、学習に「使える道具」となってきたのである。

また、先進的な実践が蓄積されるうちに、タブレット端末を取り入れることに対するさまざまな懸念が杞憂であることが分かってきた。「アナログをデジタルに置き換えることで、紙に書く経験が減り、字が書けなくなるのではないか」といった声が、議論当初に聞かれたものだが、アナログがデジタルに置き換わるというよりも、アナログを補足するという活用になることが分かってきた。アナログVSデジタルではなく、アナログ×デジタルという使われ方をしているのである。

SNS (Social Networking Service) など、ネットワークを介した事件に子どもが巻き込まれるのは、学校教育で情報リテラシーの指導ができないからである。学校教育では限定的な情報モラル教育が行われているのみであり、多くの子どもは生活の中で経験的に身に付けた情報リテラシーのみで現実世界と対峙している。自ら高いリテラシーを身に付けられない人は、不利益を被っているのである。そのようなことをなくすためには、どの子にも情報リテラシーの指導をすることが必要であり、それには、自分用の1人1台の端末を児童・生徒が持って、授業の中で、モラルとセットで教科内容を身に付けていくことが一番の近道である。

片山敏郎 (新潟大学教育学部附属新潟小学校)